

これらを仔細に検討することにより、『医心方』の撰述・伝写等を解明する手掛りがえられると考えている。今回はこの中、次の二つの文章について考える。

一、卷二の卷首

夫黄帝明堂経華扁緘灸法或繁文奥義卷軸各分或上孔下穴次第相違既而去聖綿邈後學暗昧披篇案文之間急疾難治取艾作炷之要穴易迷是以頭面手足胷脇腹背各隨其處盡抄其穴主治之法略注穴下針灸之例詳付條末專依軒宮之正經兼拾諸家之別說唯恐輕以愚孱之思猥亂聖賢之蹤譬猶復蠅之自迷燈爍蟬之不知雪矣

二、卷十四の五十九丁

今案天平九年六月廿六日下諸國官符云九是疫病名赤斑瘡初發之時既似瘡疾瘡出之間經三四日支體府藏大熱如燒當是之時欲飲冷水固忌莫飲以綿能勒腹腰必令温和勿使冷寒又鋪設既薄无卧地上唯於床上敷箒牀得卧息又粥饘并煎餅粟等汁温冷任意可用又糲粳糴以湯饘食之又病癒之後雖經廿日不得輒喫鮮魚菜菓菜并飲水及洗浴房室強行步當風雨年魚不可食但乾鰓堅魚等煎否皆良

(京都市)

## 『福田方』組成文献の解析

小曾戸 洋

『福田方』全十二巻はわが国南北朝時代の僧有隣(常陸国鹿兒郡東福寺開山)によって一三六三年頃に著わされた医書である。この書は引用文献名を明記しており、そのうちには佚書も含まれることから、中国古医書輯佚の材料として看過できぬものである。また当時いかなる医書が日本に舶載されていたか、すなわち医学文化資料伝来の実情を探る絶好の文献でもある。あるいは田代三喜・曲直瀬道三を生む基盤になったとも目される。このように『福田方』は日中医学史上極めて重要な書でありながら、今日その研究はほとんどなされていない。演者はこのたび全巻を通検して引用書名索引を作製し、『福田方』組成文献について初步的解析を行ったので報告する。底本はいま日本古典全集本による。

漢代の書に由来すると考えられる医書からの引用に「内

經」「素問」「靈樞經」「針經」「明堂經」「難經」「本草」「傷寒論」などがある。とくに「素問」からの引用は多く、篇名を示す場合もしばしばある。記載からみて、底本に林億らの宋改を経たものが用いられたことはまず疑いない。「靈樞經」「難經」「傷寒論」は中国版本に由来するものである。 「傷寒論」は「注云」として成無己注を引くことから、『注解傷寒論』が用いられたことが特定できる。舶来元刻版によるものか。「針經」「明堂經」は日本古来の伝承本に基づくものである。

おおよそ六朝時代の成立にかかると思われるものに「王叔和」「張苗」「陳廩丘」「葛氏方」「范汪方」「秦承祖方」「小品方」「僧深方」「徐文伯」「通玄經」「椿澄」「鬼遺方」「陶隱居」「肘后方」「如意方」「龍門方」、ないしは「炮炙論」「神仙服餌論」「彭祖」などがある。多くは佚書である。すべて直接引用とはいえないが、たとえば「小品方」などは『医心方』にも引かれない文章のあることから、直接引用されたものと考えられる。「葛氏方」からの引用は多い。

おおよそ隋唐の成立にかかるとものに「病源論」「古今録

驗方」「玄感伝屍方」「千金方」「唐本注」「千金翼」「千金隨」「崔」「崔氏食經」「必効方」「張文仲」「日華子」「本草拾遺」「外台方」「広利方」「伝信方」「産宝方」「食医心鏡」、ないしは「拯要方」「新録方」「耆婆方」「五藏論」「膳夫經」などが見られる。このうち「千金方」からの引用は約一五〇回ほどあり、後出の「和剂局方」に次ぐ引用量である。その引用文を検することによって、底本は日本古来の伝写本ではなく、宋改を経た版本に基づくものであることが知れる。

五代の成立にかかるとものには「張詠」「万全方」がある。北宋の成立にかかるとものとしては「九籥」「衛生方」「活人書」「史載之方」「指迷方」「図経」「聖恵方」「聖濟方」「蘇沈良方」「銅人經」「斗門方」「必用方(養生必用方論)」「本草衍義」「靈苑方」「和剂局方」などがある。このうち「和剂局方」(局方・局方総論・局方指南・和剂方総論・和剂方指南などと引く)からの引用はおよそ一八〇回あって、その影響力の強さを物語っている。「衛生方」「斗門方」「靈苑方」などはすでに佚書である。

南宋のものでは「易簡方」「家蔵方」「簡易方」「既効方」

「究源方」「御藥院方」「鷄峯方」「外科精要」「濟生方・續方」「三因方」「十便良方」「朱氏方」「傷寒類書」「鍼灸資生經」「葉氏方」「選奇方」「大衍方」「直指方」「本事方」「未(末)病方」などがあり、とりわけ「直指方」「濟生方」「三因方」「簡易方」「選奇方」「家藏方」「本事方」からの引用は多い。「既効方」「究源方」「選奇方」「大衍方」などは佚書である。

元代のものとしては「得効方」がある。その成立から『福田方』までは約二十五年しか隔たっていないから、当時に最新の医書がすみやかに導入されていたかが知られる。

年代未特定のものには「百一方」「道濟方」「医学方」「海上方」「普濟方」「医門方」「医余」「至適方」「医学全書」「効驗方」「楊氏方」ほか多数がある。

このほか非医書としては「孟子」「呂氏春秋」「史記」「説文」「班固」「帝王世紀」「魏志」「文選」「荆楚記」「賢愚因縁経」「太平御覽」「唐書」「東坡尺牘」「事林広記」といった書からの引用が見られる。たとえば「御覽」など、いかにして有隣がこれを検したのであるうか。

日本の文献では出雲広貞の所述を引用しており、日本医学史上すこぶる珍重すべき記載である。これについてはいづれ機会を改めて発表する。

以上、現時点で引用文献約一五四種、一二〇〇余条を検出した。なお有隣自身の言葉は「私云」として約一三〇処に述べられており、その医薬知識が尋常のものでなかったことを示すに充分である。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所医史文献研究室)